

ベストクラス選定理由書

作成者：山田詩織、原上寛規、綿貫克洋、勝田太郎、小倉早織、小川公大、高橋優太、吉水裕也、藤原和政、藤井良憲

科目名称：かかわりの発達心理学（昼間クラス）		(担当教員名：中間 玲子)	
課程：大学院（修士）	開講時期：前期		
授業形態：講義・演習	授業規模：30人以下		
インタビュー対象教員名：中間 玲子 (実施日時：令和4年8月29日(月)14:30~14:50；実施場所：Zoomにより開催)			
インタビュー対象受講者名：中村 宏美、謝 永喆、寺田 英明 (実施日時：令和4年8月29日(月)13:00~13:50；実施場所：図書館グループラボ)			
<u>①生涯を通じた発達心理学</u> 本授業は、学校現場における、目の前の生徒のみに焦点を当てるのではなく、「発達」とは生きていく中で永続的に続いていくものであるという観点から、受講者自身の「発達」にも目をむけて考えていくことを目標としている。そして、「これまでの発達過程」だけでなく「これからも生涯通じて発達していく」という見方を養ってほしいという授業者の願いがあった。			
<u>②豊富な研究知見</u> 授業においては様々な心理学研究の知見に基づいて事例を紹介するとともに、研究の手続きやグラフ・数値の読み方など、結果のみならず、そこに至るプロセスも説明されており、大学院レベルの「研究者としての視点」も習得できるように構成されている。前述の知識を活用しながら、Formsを活用してテーマに基づく事前・事後課題を実施し、授業者は、次週の授業までに、取りまとめた資料を受講者に配布しているとのことであった。授業者は、この目的として、【答えのない事象に対して、学生個々に多様な考えがあるということを知って欲しいため】とした。この事後指導が、受講者の多様な考えを共有し、自分と照らし合わせるという営みに、大きく関わっていると考えられる。			
<u>③受講者と一体化した授業</u> 学期途中から、ハイフレックス制が取り入れられ、対面で受講する者、オンラインで受講する者、それぞれに分かれた。受講者のお話しでは、【対面で参加の学生、オンラインで参加の学生それぞれでグループワークが行われ、事例について話す機会が多く確保されており、自分自身と照らし合わせて考えることができた】、【異なる背景や、経験を持ち合わせた学生と話し合うことが興味深かった】といった所感があった。 ハイフレックス制の中でも、授業者は対面で来ている学生の表情に注目し、理解が難しそうな場面では、詳細の説明を加えることや、学生の問いに答えるなど、授業者と受講者の相互のやり取りが行われているという、受講者のお話しが印象的であった。また、個々の受講者が、授業を通して自身を振り返り、「発達」というものを一連の営みとして認識する姿や、その受講者の問いや困難を解決しようとする授業者の熱意が感じられ、クラスが相互関係によって成立していると見受けられた。 以上のことから、本授業はベストクラスに相応しいと考える。			